

平成30年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名

【 京都市 】

1 実践テーマ	【 II 】
2 実施対象者	京都市立朱雀第六小学校 5年1組（30人） 3組（2人）：育成学級
3 展開の形式	（1）学校における活動 ① 教科名（ 総合的な学習の時間「共に生きる」 ） ② 行事名（ ） ③ その他（ ） （2）地域における活動 ① イベント名（ ） ② その他（ ）
4 目標 (ねらい)	京都市にゆかりのある身障者スポーツ選手と交流する中で、選手ご自身の努力や思い、自分（児童）たちへの願いを知ること、自分たちができることは何かを考え、発信していく学習としていく。そして、これからの自分自身の生き方に対しても考えていくきっかけにもしていきたい。また、車いすを使用している本校2年児童への理解を深め、人権意識を高めていく機会にもつなげていく。
5 取組内容	<p>事前学習として、2020年東京オリンピック・パラリンピックについて、オリンピックの歴史や競技種目・活躍した選手などについて調べ、学習を進めた。後半には身体に障害のある人たちが自分の限界に挑戦されているパラリンピックにも目を向け、学習の場を広げていくように進めた。</p> <p>10月31日（水）に、アテネ・北京パラリンピック競泳競技に出場されて7位にも入賞されている北村友里選手から、ご自身が障害を負った経緯についてお聞きし、選手として活動していくに至った心境の変化を知った。そして、国際大会ならではの選手村や競技場でのエピソードを語られ、気づかない部分に触れることもできた。また、車いすの操作についての基本的なことを教わった。北村選手が獲得された実物のメダルに触れ、幅広い考え方や競技に真剣に取り組んでおられる姿勢から、今の自分たちの過ごし方に対して考えるヒントを多くいただけた。</p>



11月16日(金)に、北京パラリンピックで車いすバスケットチームのコーチとして活躍された坂野晴男さんと、京都の車いすバ



スケットチームの山本英嗣・和田憲有選手の3名の方に来校いただき、車いすバスケットの話や競技のデモンストレーションを見せていただいた。その後、子どもたちも競技用車いすに乗って実技指導を受け、簡単なゲームをすることで、車いすを

使った競技への関心を高めることにつながった。最後に、選手から自らが障害を負った経緯とその後の心境や考え方がどのように変化してきたかという体験を聞かせていただいた。その中で、子どもたちはそれぞれで、いろいろな人が共に生きていける世界を実現させ継続させていくためにはどのようなことを大切にしていかなければならないかを考えていくきっかけとなった。

事後学習として、オリンピックやパラリンピックのことだけでなく、人にやさしい街とはどのようなものかという視点に立ち、自分たちが暮らしている身近な地域を見直し、良い点・課題とすべき点について考え、校内で発信する学習活動を継続させていった。

## 6 主な成果

事前学習において、オリンピックやパラリンピックのことについて調べ学習に取り組んでいる時は、自分たちの生活とは少しかけはなれた別の世界という雰囲気があった。特に、パラリンピックについてはその傾向が強く感じら、「がんばったはるな。」「たいへんだろうな。」「りっぱだな。」といった感想が多くみられた。

選手の皆様に、実体験としての話を聞かせていただいたり、車いす競技の体験をしたりすることで、身近なこととしてとらえられるようになった。そこから立ち直っていくきっかけとなった要因などは強く心に残ったようで、自分たちもしっかりと学び、仲間を大切にしていきたいという気持ちに向いていったことがそれぞれの感想から感じ取れた。



また、車いす操作や競技を実体験することで車いす生活の大変さを実感するだけでなく、自分たちができることは何かという視点に立ち、日常生活の様子を振り返ることができた。

## 7 実践において工夫した点(事業の特色)

ほんまもんに触れる・出会うという体験は、子どもたちに与える感動を大きくする。実物のメダルや現地でのエピソード、競技の師範などを肌身で感じることで興味関心が大きくなる。その上で、現実に努力されたことやそこに至るまでの心の葛藤の様子を知ることによって各自が考える学習に結びつけられるように講師の方との事前打ち合わせを進めた。

事前学習や事後学習にしっかりと取り組むことで、社会の中で「共に生きる」ために何が必要で、自分たちにできることは何かを一人一人が考えることで、学んだことを校内の多くの仲間に発信できるように進めた。そして、自らも行動できるように支援の声かけも続けた。

## 8 主な課題等

昨年度とほぼ同じ形で実施でき、講師の方にも依頼することができた。課題は講師の方をいかに依頼できるかという点と運送費や謝礼の確保と考える。依頼を引き受けていただける各種団体や個人のリストなどが整備され、提示されているとありがたいと思う。また、金銭的

	<p>な支援も継続されることを望む。</p> <p>校内は、十分にバリアフリー対応のできている施設とは言えない。来校いただく方に不自由なことがないように工夫しなければならないと感じる。このことは、事項に在籍する車いす使用の児童にも有効と考えるので、引き続き改善の要望はしていきたい。</p>
<p>9来年度以降 の実施予定</p>	<p>大変有意義な学習であるので、引き続き指定を受けられるのであれば、5年生を対象にした継続的な取組としていきたい。支援事業が終了した時点で、次年度はどうするかを検討していく必要がある。事業の方向があれば早い目に知らせていただきたい。</p> <p>日常的に、在籍する車いす使用の児童に対しての心配りが自然とできている児童が多くなってきている。学校の仲間として自然に児童同士が助け合える姿を高めていくためにも、いろいろな視点からの話を見聞きする場を工夫していきたい。また、学んだり考えたりしたことを校内にとどめるのではなく、地域にも広めていけるような場がないか検討を進めていきたい。</p>